

丹波焼の流通・消費に関する予察

長谷川 眞

はじめに

丹波焼は、桃山時代から江戸時代の茶会記や日記類に登場する茶陶を除くと、1857年（安政4年）の金森得水著『本朝陶器攷証』をはじめ『丹波志』・『観古図説』・『工芸志料』・『日本陶器全書』などに記述されているものの、いずれも近世から近代にかけての丹波焼について触れるのみで、内容も茶陶が中心であった。

また、大正末年から昭和初期にかけて丹波焼が民芸運動の一環として柳宗悦らによって取り上げられるようになると、地元にも大きな刺激を与え、丹波篠山市の中西幸一や綾部市の守田種夫などの大蒐集が始まり、丹波焼研究の推進に大きな役割を果たした。しかし、中世も含めた丹波焼について実地に古窯跡を踏査し、本格的な学術研究が開始されたのは昭和10年代の杉本捷雄の一連の古窯跡の踏査結果や採集資料をもとにした研究が嚆矢といえる。

このようにして始まった本格的な学術研究は、伝世資料を中心とした研究から窯跡出土資料や消費地出土資料による実証的な研究へと進み、変遷や系譜関係はもとより、生産技術の移入・導入・拡散や供給・流通システム、生産体制、さらには消費動向についても解明されつつある。

本稿では、杉本以降の丹波焼研究の歩み⁽¹⁾を簡単に振り返るとともに、流通・消費の様相を整理し⁽²⁾、併せて流通経路や兵庫津をはじめとする流通拠点の実態解明に向けた基礎作業をおこなう。

なお本稿では、中世を12世紀後葉～14世紀前葉（生産技術の受容期）、14世紀中葉～15世紀後半（独自性の出現期）、15世紀末～17世紀前葉（中世的様相の変容期）の3期に、また中世から近世への移行期の17世紀前半（窖窯から登窯への転換期）をはさみ、近世を17世紀中葉～18世紀前半（近世的様相の確立期）、18世紀中葉～後葉（近世丹波焼の展開期）、18世紀末～19世紀（近世的様相の変革期）の3期に区分し、流通・消費の状況を概観する。

1 研究史

本格的な丹波焼研究の先鞭をきった杉本の研究は、その後丹波焼研究を主導した榑崎彰一によって、「1937年（昭和12年）の『茶わん』誌上に「丹波の古窯に就いて」を発表して以来、1969年に『改訂丹波の古窯』をまとめるまで、三十数年間に執筆した著書・論文は44編に達し、丹波焼研究の基礎をつくった」と高く評価された（榑崎1977a）。

ただ、杉本の踏査によって数多くの窯跡は知られていたものの、窯跡の発掘調査事例は皆無であり、研究は窯跡採集資料や伝世品に頼らざるをえない状況であった。

このようななか、丹波焼研究を主導した榑崎は杉本の研究成果を継承しつつ、窯跡採集資料や伝世資料の型式学的分類をもとに中世丹波焼の編年研究を進めると同時に（榑崎1976・1977a）、全国的な観点から中世土器・陶器を瓷器系・須恵器系・土師器系に大別し、確定的ではないとしながらも丹波焼を須恵器系に分類した（榑崎1977bなど）。その後、丹波焼出現期の窯跡とされる三本峠北窯跡・灰原や緑風台窯跡の発掘調査がおこなわれ（西脇市教育委員会1983、兵庫県教育委員会1980）、丹波焼が東海地

方の瓷器系陶器窯と関連が深いことが明らかになった。

また、大槻伸・岡崎正雄らは、壺・甕・播鉢の特徴を詳細に抽出し、あわせて各器種の変遷についても体系的に論じた（大槻1977・1989、兵庫県教育委員会1989）。これら一連の研究により、丹波焼への生産技術の移入・導入の大枠が示されるとともに、中世丹波焼の編年案がほぼ確立された。さらに1990年代には、東海地方の瓷器系陶器窯から丹波焼への技術伝播の様相の詳細な検討がなされ（森田1991、吉岡1994）、東海地方の瓷器系陶器窯のなかでも常滑焼からの窯業技術の移入・導入が契機となり、緑風台窯跡の操業開始をもって丹波焼が成立・出現したことが明らかとなった（中野1996）。

一方、近世丹波焼の編年研究は、中世丹波焼と同様に窯跡の発掘調査がおこなわれていないため、窯跡採集資料や伝世品を中心に進められてきた。このような状況下で、1997年、檜崎によって近世丹波焼の編年案が初めて提示された（檜崎1977a）。

さらに、1981年に姫路城跡、1987年に下相野窯跡の発掘調査が実施され、報告書が刊行されるなど（兵庫県教育委員会1992、兵庫県立歴史博物館1985）、発掘調査成果の蓄積も図られるようになると、広瀬和男・長谷川眞・大平茂が播鉢の編年案を各々提示し、考古学的な資料・方法による研究が本格的にはじまった（能勢町教育委員会1985、長谷川1988、兵庫県教育委員会1992・1993）。

また、三本峠北窯跡・窯体内、三本峠南窯跡、下立杭古窯跡などで相次いで実施された確認調査・発掘調査により（河野2007、篠山市教育委員会2000・2004）、窯跡の様相や製品の実態の概略が明らかになり、さらに兵庫津遺跡や伊丹郷町遺跡、江戸遺跡など消費地遺跡の発掘成果も蓄積されると、壺・甕・播鉢を中心にその系譜関係を含めた型式学的方法による編年研究の進展がみられるようになった（川口1998・2001・2002、長谷川2000・2003・2004b・2004c・2005・2006b・2007a・2009・2010・2011a・2015b、堀内2001など）。

これら編年研究の進展と軌を一にするように、流通および消費の様相も次第に明らかになっていった。

1989年、三田市に所在する中世山城の中尾城跡の報告書のなかで、岡崎は中世丹波焼の出土遺跡を集成し、生産地の丹波を中心に播磨・摂津・丹後・但馬、遠くは山城・河内・和泉・大和・紀伊・阿波にまで分布することを明らかにした（兵庫県教育委員会1989）。岡崎の論考は、中世丹波焼の流通・消費の様相を発掘資料をもとに体系的に論じた最初のものといえる。

さらに1990年代に入ると、中世丹波焼の主要3器種の器種別の流通・消費に論が及ぶようになる。

荻野繁春は、1990年に播鉢の出土遺跡を集成し（荻野1990）、1993年には壺・甕の出土状況も集成した（荻野1993）。播鉢は53遺跡・117点を数え、畿内全域から出土することを提示した。時期別の出土傾向は、13世紀代は摂津のみで、14世紀頃までは摂津と丹波の一部に限定され、出土量も少量である。16世紀前半には、摂津・丹波を中心に播磨をくわえた生産地周辺を流通範囲とするようになる。この傾向が一変するのは16世紀中頃のことで、16世紀中頃以降出土量が増加し、16世紀後葉～17世紀前葉に遺跡数・出土量ともに最大になるとした。壺・甕の出土が確認できた遺跡は54遺跡を数え、出土数は128点にのぼる。荻野によると、主要な流通範囲は丹波・摂津・山城・和泉・丹後で、播磨・但馬・河内・越前にも流通し消費された。また、備前焼に比べて流通・消費範囲が矮小であるが、陸上輸送が中心であった点と器種の大型化が不十分であったことが要因であるとした。

一方近世丹波焼は、播鉢の編年研究が進展していたことから、江戸遺跡など大消費地でも丹波焼播鉢が一定量出土することが明らかになり、時期別の流通・消費についての研究も進展した（長佐古・

堀内1998)。長佐古真也・堀内秀樹は、江戸遺跡での丹波焼播鉢の全播鉢に占める比率は17世紀代には37.6%、18世紀代には15.0%、19世紀には9.8%と推移することを明らかにした。

このように製品の流通・消費の様相の一端が明らかになると、とくに近世丹波焼に関しては、製品の流通はもとよりその供給・流通システムの解明にも論が及ぶようになった。

中世の製品流通に関して、流通拠点と目される遺跡での出土例も報告されるようになってきた。日宋貿易の拠点ともなった兵庫津遺跡では、13～14世紀の丹波焼が一定量出土した（兵庫県教育委員会2004）。また、博多遺跡においても14世紀後半～15世紀初頭と考えられる丹波焼甕が少数ではあるが確認され、コンテナとして使用されていたことが明らかになった（大庭2004）。さらに、中世京都においても14世紀後半以降、播鉢を中心に丹波焼が一定量出土することが注目されはじめた（中井2005）。

一方近世については、江戸遺跡など大消費地で一定量出土する播鉢の生産状況を分析した長谷川は、「単一器種生産窯」といえる状況で生産されたもので、いわゆる「粗製品」とされる播鉢を「専焼」する生産体制によって供給されたとした（長谷川2004a）。同時に近世播鉢は、加古川の舟運を利用し高砂港を積出港としているが、江戸などの遠隔地への流通拠点は兵庫津と考えられる。加古川舟運には、江戸遺跡で丹波焼播鉢が大量に消費された17世紀中葉から18世紀前半には、大坂商人の介在が認められる。生産地では、営業能力に優れた商人に製品の販売を請け負わせる「窯座経営」により製品流通システムの整備を図り、大消費地への播鉢の本格的な出荷に対応した。つまり、生産の分業化・専門化にくわえ、確実な流通拠点と販売ルートを確保できる大坂商人などの大資本が参加することによって、また販売のノウハウを持つ商人が介在することによって、消費地の大量需要に応える供給システムが確立されたと理解した。

また長谷川は、播鉢生産と甕生産を比較検討し、外部需要に即応する供給システムとしての地域間の分業体制について論じ、その後、地域間分業にとどまらず窯跡間分業もおこなわれていたことを明らかにした（長谷川2004c・2006a）。さらに、消費地の大量需要に応える供給システムは、「仕送銀」と呼ばれる前貸制度を前提とした独占的な集荷・販売システムで運営されたと想定した（長谷川2007b）。

このように、生産地サイドからの供給・流通システムを含めた生産体制への言及の増加にともない、消費地サイドから丹波焼の流通・消費をとりあげた研究が活発化しはじめた。

2005年、森村健一は堺環濠都市遺跡での備前焼や丹波焼を含む陶磁器の出土状況を総合的に整理し、中世末から近世初頭の時期には政治と経済は密接に関連していたことを示した（森村2005）。堺環濠都市遺跡では、15世紀第4四半期に大甕・播鉢が常滑焼から備前焼へと移行する。その後、17世紀前半には備前焼播鉢から丹波焼播鉢への転換が起こる。播鉢の備前焼から丹波焼への交代は、豊臣体制を背景とした堺商人の衰退と、丹波焼を支配する大坂商人が徳川体制下で商圈を獲得したことに起因するとした。

同年、松岡千寿は播鉢を中心に、近世丹波焼の出土傾向を概観し、総括した（松岡2005）。松岡は、17世紀前半の丹波焼播鉢の急速な流通拡大の背景には、生産の拡大、流通経路の獲得と大坂商人の介在、競合する備前焼の生産動向の変化、消費動向の変化などの要因があったとした。

さらに2006年、乗岡実によって中国・四国地方の、森村によって関西の近世土器・陶磁器の出土傾向が示された（乗岡2006、森村2006）。また2007年には、川口宏海が主催したプロジェクトにおいて、近世丹波焼の全国規模での流通・消費状況がまとめられた（大手前大学史学研究所オープン・リサーチセンター2007）。集成は、京・大坂・江戸の三都にくわえ、大坂周辺や四国を含めた全国各地に及ぶ。なお、三都を中心とする全国的な出土状況から導出された流通・消費状況の消長は、2005年に松岡が指摘した

ように生産と消費は表裏一体の関係にあり、外部需要に即応する生産・供給システムを丹波焼が採用していたことを裏づけた。

これらの成果を受け、長谷川は14世紀中葉以降の全国的な主要遺跡を集成し、各時期の分布状況・分布傾向、流通する主要器種を整理した（長谷川2015a）。なお、加古川下流域に位置する大野遺跡（兵庫県教育委員会2010）や瀬戸内海沿岸部の兵庫津遺跡の様相から、大野遺跡は丹波焼の積出港、兵庫津遺跡は遠隔地への流通拠点とできる。また土製煮炊具の分析結果を援用し、14世紀後葉～15世紀前葉の間に、南北方向は陸路や加古川の舟運を利用した流通経路が、東西方向は瀬戸内海航路などの海路による流通経路が成立していたことを提示した。さらに、近世以降も中世後半期に確立した流通経路を踏襲するが、加古川の舟運が本格的に整備されるのは近世前期である。加古川舟運を利用して移出された丹波焼は、高砂港を積出港とし、遠隔地への流通拠点は兵庫津であった。なお生産地から加古川の河岸の船着場までは、荷駄によって輸送されていたとし、流通経路にも言及した。

その後、長谷川は、近世の備前焼播鉢・備前系播鉢（堂島播鉢・堺播鉢・明石播鉢）および丹波焼播鉢の消長を整理し、生産地から消費地への移出には、いずれも問屋・仲買などの商人の関与が確認でき、大規模資本が介在するほど流通圏は拡大する傾向にあり、流通圏の拡大は消費量の増加とそれに見合う生産量の増加が前提となっていたといえることを導き出した（長谷川2019）。

なお、2011年に潜水調査のおこなわれた伊豆・初島沖海底遺跡では、上方から江戸に向かう17世紀中頃～18世紀前半と想定される廻船が発見され、江戸城もしくは幕府関係施設用の御用瓦とともに大量の丹波焼播鉢が積荷として積まれていた（特定非営利法人アジア水中考古学研究所2013、長井2018）。丹波焼の流通経路を含めた供給システムを解明する重要な発見といえる。

このように、丹波焼の流通・消費の研究は、供給・流通システムや流通経路にまで及ぶようになり、研究は新たな局面を迎えているといえよう。

2 中世の様相

(1) 生産技術の受容期：12世紀後葉～14世紀前葉

丹波焼の成立期ともいえる本期の製品は、福原京推定地の楠・荒田町遺跡、二ツ屋遺跡、鹿野宮ノ前遺跡、石峯寺境内遺跡、塩田遺跡、常勝寺裏山遺跡、兵庫津遺跡、安養寺遺跡、馬場寺遺跡、山国・源ヶ坂遺跡などで出土している。

出土状況は生産地の周辺はもとより、楠・荒田町遺跡や兵庫津遺跡、二ツ屋遺跡など瀬戸内海沿岸部にも及ぶが、生産地の近隣を除き点的に分布する傾向が指摘できる。また出土する器種は、石峯寺境内遺跡や塩田遺跡、常勝寺裏山遺跡など多くの中世墓では壺を中心とするものの、楠・荒田町遺跡や兵庫津遺跡など拠点的な遺跡では甕も一定量確認されている。

これらのことから、消費地での受容は「点」的ではあるが、中世墓にとどまらず比較的近傍の拠点的な都市や流通の結節点でも活発におこなわれ、甕も一定量受容されたものの、中心は壺であったといえよう。

(2) 独自性の出現期：14世紀中葉～15世紀後半

室町時代になると出土遺跡も増え、生産地である丹波の安養寺遺跡や喜田中世墓遺跡、馬場寺遺跡をはじめ、摂津の井ノ方遺跡や有鼻遺跡、堂坂遺跡、播磨の大野遺跡や岩座神神光寺遺跡、小谷遺跡、浄谷遺跡、野村構居跡、貝の前遺跡、但馬の妙楽寺ヒシロ遺跡など数多くの遺跡での出土が確認されている。

また、瀬戸内海沿岸部の兵庫津遺跡や遠くは平安京、堺環濠都市遺跡、根来寺跡、さらには博多遺跡でも当該期の製品が出土している。

出土遺跡は、生産地の位置する丹波はもとより隣接する播磨・摂津・但馬へと広がり、大野遺跡を一次流通拠点、兵庫津遺跡を遠隔地への流通拠点すなわち流通の結節点として、首都京都をはじめとし、堺・根来寺・博多などの遠隔地へも線的ではあるが分布域が拡大する。また出土する器種は、前代の壺中心の器種構成から貯蔵形態の壺・甕2器種中心へと変化し、播鉢も一定量出土するようになる。なお博多遺跡での甕の出土事例は、交易物のコンテナとして博多に搬入されたと想定されている。

これらのことから、丹波焼が前代の「点」から「線」へとつながりを持って分布するようになり、大野遺跡・兵庫津を流通拠点として首都京都や博多などの遠隔地へも壺・甕を中心に移出されたといえよう。

(3) 中世的様相の変容期：15世紀末～17世紀前葉

近世丹波焼への胎動期ともいえる本期の製品は、初田遺跡、中尾城跡、伊丹郷町遺跡、野村構居跡、姫路城跡、篠山城跡など数多くの遺跡で出土している。また兵庫津遺跡や首都京都、堺環濠都市遺跡などとともに、その周辺の遺跡でも当該期の製品の出土が確認され、遠くは越前・一乗谷朝倉氏館遺跡、尾張・清洲城跡でも出土が確認されている。

出土状況をみると、生産地の周辺、拠点的な消費地の周辺を問わず、面的に分布する傾向が指摘できる。また出土する器種は、従来の壺・甕中心から播鉢に比重を移しつつある状況が看取できる。

これらのことから、消費地での受容は流通拠点の兵庫津や首都京都、堺環濠都市遺跡などやその周辺を含め「面」的な広がりを持ち、かつ壺・甕にとどまらず播鉢をも受容・消費されたといえよう。

3 窖窯から登窯への転換期の様相：17世紀前半

400年余の永きにわたる中世丹波焼が終焉を迎え、近世丹波焼が誕生する本期の消費地での受容状況をみると、中世的様相の変容期とした15世紀末～17世紀前葉と同様に、中尾城跡・伊丹郷町遺跡・野村構居跡・姫路城跡・篠山城跡など数多くの遺跡で丹波焼が出土している。また兵庫津遺跡や首都京都、大坂城跡、堺環濠都市遺跡などとともに、その周辺の遺跡でも当該期の丹波焼の出土が確認されている。さらに、陸奥・南小泉遺跡でも出土が報告されている。

出土遺跡は生産地の周辺、拠点的な消費地の周辺を問わず面的に分布する傾向が、中世的様相の変容期とした15世紀末～17世紀前葉と同様に指摘できる。また首都京都、大坂城跡、堺環濠都市遺跡などの様相から、出土する器種は従来の壺・甕中心からより一層播鉢に比重を移しつつある状況が看取できる。

これらのことから、消費地での受容は前代同様、兵庫津や首都京都、大坂城跡、堺環濠都市遺跡などやその周辺を含め「面」的な広がりを持ち、かつ壺・甕にとどまらず播鉢をも受容・消費されたといえよう。

4 近世の様相

(1) 近世的様相の確立期：17世紀中葉～18世紀前半

江戸時代に入り、近世的な様相が確立する本期の丹波焼は、生産地の周辺に位置する篠山城跡・伊丹郷町遺跡・明石城跡・姫路城跡はもとより、首都京都や大坂城跡とその周辺遺跡、遠くは江戸遺跡や美作・八幡円明寺跡、伊予・大洲城跡、陸奥・仙台城跡および養種園遺跡でも出土が確認されている。ま

た丹波焼の消費地への供給の一次流通拠点となった高砂町遺跡や遠隔地流通の拠点となった兵庫津遺跡でも出土している。

出土状況は生産地の周辺、拠点的な消費地の周辺を問わず、面的に濃密に分布する傾向が指摘できる。また首都京都、大坂城跡、江戸遺跡などの様相から、出土する器種は従来の壺・甕中心から播鉢に比重を移し、とくに都市部へは播鉢を重点的に供給する状況が看取できる。

これらのことから、消費地での受容は高砂港・兵庫津を流通拠点とし、京・大坂・江戸の三都やその周辺を含め「面」的な広がりを持ち、とくに都市部では播鉢が集中して重点的に受容・消費されたといえよう。

(2) 近世丹波焼の展開期：18世紀中葉～後葉

江戸時代中期になると、京・大坂・江戸の三都やその周辺地域はもとより、流通拠点の兵庫津遺跡や高砂町遺跡、生産地周辺の篠山城跡・伊丹郷町遺跡・明石城跡・姫路城跡でも引き続き丹波焼の出土は確認されている。しかしながら、いずれの遺跡においても出土量は減少し、とくに播鉢は激減している。

出土状況は生産地の周辺、拠点的な消費地の周辺を問わず面的に分布する傾向が指摘できるものの、いずれの遺跡においても出土量は減少する。とくに首都京都、大坂城跡、江戸遺跡などの様相から、出土器種は播鉢が激減し、終始一定量供給・需要された甕が相対的に目立つようになる。

これらのことから、消費地での受容は、引き続き高砂港・兵庫津を流通拠点とし、京・大坂・江戸の三都やその周辺を含め「面」的な広がりを持つものの、消費地での受容・消費の中心は播鉢から甕に移り、かつ甕も一定量に過ぎなくなったといえよう。

(3) 近世的様相の変革期：18世紀末～19世紀

各種の徳利が盛行する本期は、近世丹波焼の展開期とした18世紀中葉～後葉と同様に、京・大坂・江戸の三都やその周辺地域はもとより、流通拠点の兵庫津遺跡や高砂町遺跡、生産地周辺の篠山城跡・伊丹郷町遺跡・明石城跡・姫路城跡でも引き続き丹波焼の出土が確認されている。

ただ前代と様相を異にする点は、生産地周辺では壺・甕・播鉢・徳利の出土が確認できるものの、三都のうち京・大坂では徳利の出土が多数を占め、江戸では播鉢が量的には減少するとはいえ一定量出土している。

出土状況は生産地の周辺、拠点的な消費地の周辺を問わず、面的に分布する傾向が引き続き指摘できる。また京・大坂・江戸の様相から、出土する器種は江戸では依然として播鉢を中心とするものの、京・大坂の上方では甕・播鉢から壺の一種、一類型である徳利に比重が移行した状況が看取できる。

これらのことから、消費地での受容は高砂港・兵庫津を流通拠点とし、京・大坂・江戸の三都やその周辺を含め「面」的な広がりを引き続き持ち、また京・大坂を中心とする上方では徳利が、江戸では播鉢が受容・消費されたといえよう。

おわりに

丹波焼の流通・消費の研究は、供給・流通システムや流通経路を含め総合的な研究の段階にいたり、その点に留意しつつ、実態解明に向けた基礎作業をおこなった。

全国的な様相を概観すると、分布状況は、中世は畿内や丹後・丹波・播磨・若狭・越前・伊予・尾張・筑前などに及び、近世は京・大坂・江戸の三都およびその近郊の都市部を中心に、ほぼ全国的みられ、備前焼の影響下と想定される美作や、遠く陸奥や尾張でも出土が確認された。その分布傾向は、点から

線、そして面、さらに面＋濃密地域（江戸）から、面＋濃密地域（都市部・主に京・大坂）へと変化する事がわかった。

また主要な器種は、中世は、壺から甕、そして播鉢へと主体は移るものの、壺は終始一定量、甕・播鉢は増減を繰り返していることが指摘できた。また、近世は壺＋播鉢（江戸が濃密地域）から、徳利（京・大坂を中心とする都市部が濃密地域）＋甕へと変化する。一方、徳利が広域流通品の中心といえ、甕は狭域流通品で終始一定量であることも抽出できた。さらに流通拠点については、一次集散地は中世は大野遺跡、近世は高砂港とでき、遠隔地交易の拠点は、終始、兵庫津であったことが明らかとなった。

今後、これらの成果をもとにより精緻な流通・消費の様相を明らかにしていきたい。

【註】

- （１）丹波焼の研究史は、別稿で詳述しているので参照されたい（長谷川2011b）。
- （２）各個別遺跡の典拠など、参考文献は紙数の関係上割愛した。後日稿を改めて、流通・消費の詳細な様相とともに提示する予定である。

【引用・参考文献】

- 大槻伸 1977 「丹波」『世界陶磁全集』3、中央公論社、pp.290～296
- 大槻伸 1989 「丹波焼概説一穴窯時代」『古丹波名品集』、丹波古陶館、pp.108～121
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチセンター 2007 『近世丹波焼の研究』
- 大庭康時 2004 「博多への国産遺物の流入」『公開シンポジウム 中世瀬戸内の流通と交流 資料集』、公開シンポジウム「中世瀬戸内の流通と交流」実行委員会、pp.143～156
- 荻野繁春 1990 「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集、国立歴史民俗博物館、pp.71～244
- 荻野繁春 1993 「中世西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井考古学会会誌』第11号、福井考古学会、pp.45～94
- 川口宏海 1998 「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『榑崎彰一先生古希記念論文集』、榑崎彰一先生古希記念論文集刊行会、pp.300～315
- 川口宏海 2001 「近世丹波焼の時期的変遷について」『近世信楽焼をめぐって 研究集会資料』、関西陶磁史研究会、pp.79～100
- 川口宏海 2002 「近世丹波焼の壺・甕の変遷について―兵庫県伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として―」『関西近世考古学研究』X、関西近世考古学研究会、pp.94～106
- 河野克人 2007 「下立杭古窯跡」『近世丹波焼の研究』大手前大学史学研究所オープン・リサーチセンター、pp.1～25
- 篠山市教育委員会 2000 『三本峠北・南窯跡』
- 篠山市教育委員会 2004 『下立杭古窯跡範囲確認調査概要報告書』
- 特定非営利法人アジア水中考古学研究所 2013 『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進 海の文化遺産総合調査報告書』一太平洋編一
- 中井淳史 2005 「京の備前焼―中世山城における流通状況―」『備前市歴史民俗資料館紀要』7、備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会、pp.83～98
- 長井宣子 2018 「初島沖海底遺跡を読む」『海事史研究』第75号、日本海事史学会、1～32頁
- 長佐古真也・堀内秀樹 1998 「江戸遺跡出土の『調理具・貯蔵具』」『第10回関西近世考古学研究会大会発表要旨 上方と江戸』、関西近世考古学研究会、pp.73～88
- 中野晴久 1996 「瓷器系中世陶器の生産」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム 古瀬戸をめぐり中世陶器の世界～その生産と流通』資料集、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、中野 pp.1～62
- 榑崎彰一 1976 「丹波」『原色愛蔵版 日本の陶磁』6 古代中世篇、中央公論社、pp.156～161
- 榑崎彰一 1977a 『日本陶磁全集』11、中央公論社
- 榑崎彰一 1977b 「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』3、小学館、pp.149～157

- 西脇市教育委員会 1983 『播磨・緑風台窯址』
- 能勢町教育委員会 1985 『能勢町における埋蔵文化財の調査』 I
- 乗岡実 2006 「流通⑤『中国・四国』』『江戸時代のやきもの―生産と流通―』 記念講演会・シンポジウム資料集、瀬戸市文化振興財団文化財センター、pp.295～305
- 長谷川眞 1988 「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究』 IV、日本中世土器研究会、 pp.251～259
- 長谷川眞 2000 「近世丹波系播鉢の変遷とその系譜関係」『関西近世考古学研究』 VIII、関西近世考古学研究会、pp.93～108
- 長谷川眞 2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入―杉本捷雄氏採集資料の再検討に向けて―」『中近世土器の基礎研究』 X VII、日本中世土器研究会、 pp.51～67
- 長谷川眞 2004a 「三田焼と兵庫のやきもの」『市史研究さんだ』 第 7 号、三田市、pp.1～13
- 長谷川眞 2004b 「中世丹波焼における播鉢生産」『中近世土器の基礎研究』 X VIII、日本中世土器研究会、pp.249～268
- 長谷川眞 2004c 「甕類にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究』 X II、関西近世考古学研究会、pp.1～23
- 長谷川眞 2005 「丹波」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の系譜と編年～』 資料集、「中世窯業の諸相～生産技術の系譜と編年～」実行委員会、pp.165～188
- 長谷川眞 2006a 「丹波焼における中核窯と周辺窯」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 1 号、兵庫陶芸美術館、pp.5～42
- 長谷川眞 2006b 「生産⑥『丹波』～近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』 記念講演会・シンポジウム資料集、瀬戸市文化振興財団文化財センター、pp.149～173
- 長谷川眞 2007a 「壺類にみる中世丹波焼」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 2 号、兵庫陶芸美術館、pp.23～48
- 長谷川眞 2007b 「近世丹波焼の生産と流通」『近世丹波焼の研究』、大手前大学史学研究所オープン・リサーチセンター、pp.26～46
- 長谷川眞 2009 「丹波焼の成立と展開」『丹波の名陶』、丹波古陶館、pp.226～335
- 長谷川眞 2010 「近世丹波焼の成立に関する覚書」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 5 号、兵庫陶芸美術館、pp.1～58
- 長谷川眞 2011a 「丹波窯の成立と展開」『東洋陶磁』 第 40 号、東洋陶磁学会、pp.5～20
- 長谷川眞 2011b 「丹波焼研究抄史～考古学的研究を中心に～」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 6 号、兵庫陶芸美術館、pp.1～27
- 長谷川眞 2015a 「丹波の赤・黒・白～近世丹波焼の器面装飾とその受容層～」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 7 号、兵庫陶芸美術館、pp.1～28
- 長谷川眞 2015b 「中近世丹波窯の諸相」『坐 丹波（夏）―田中寛コレクション 蒐集の軌跡―』、兵庫陶芸美術館、 pp.130～140
- 長谷川眞 2019 「『びぜん』 刻銘を持つ播鉢」『兵庫陶芸美術館研究紀要』 第 8 号、兵庫陶芸美術館、pp.51～102
- 兵庫県教育委員会 1980 『三本峠北窯跡調査報告書（遺物写真編）』
- 兵庫県教育委員会 1989 『中尾城跡』
- 兵庫県教育委員会 1992 『下相野窯址』
- 兵庫県教育委員会 1993 『伊丹郷町発掘調査報告書』
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫津遺跡』 II
- 兵庫県教育委員会 2010 『加古川 大野遺跡』
- 兵庫県立歴史博物館 1985 『特別史跡姫路城跡』
- 堀内秀樹 2001 「江戸遺跡出土の丹波産播鉢」『関西近世考古学研究』 IX、関西近世考古学研究会、pp.137～171
- 松岡千寿 2005 「丹波焼の需要について」『やきものふると丹波』、兵庫陶芸美術館、pp.143～149
- 森田稔 1991 「『石峯寺経塚』 遺物の再検討」『神戸市立博物館研究紀要』 第 8 号、神戸市立博物館、pp.1～23
- 森村健一 2005 「備前焼は、いつ堺にきたのか・そして茶の湯の大成へ」『備前市歴史民俗資料館紀要』 7、備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会、pp.61～81
- 森村健一 2006 「流通④『関西』～江戸時代のやきものか」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』 記念講演会・シンポジウム資料集、瀬戸市文化振興財団文化財センター、pp.271～294
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』、吉川弘文館